

教室における「英語的発想」と Thinking in English

吉 家 哲 夫

I はじめに

私は1996年4月に初めて大学生に英語を教えるという仕事についた。その昔のアルバイトを除き、およそ人に仕事として英語を教えたことはない。ただ30年余りのサラリーマン時代に英語を使う仕事为主であったことで、実用的な英語をある程度身につけ、英語の検定資格を幾つか取ったこと、それと1994年9月から翌年の4月にかけてロンドン大学（ゴールドスミス・カレッジ）に留学し、英語を中心に他の数科目を英語で学んだこと、これらが私の英語教師としての財産となっている。

標記のテーマは練達の先生方にとっては余りに初歩的に過ぎるものであろう。しかし、私にとっては、大学の英語教師として「如何に教えるか」を日頃考える中で、学会に出席し、若干の参考文献を読むうちに出会った“気になる言葉”なのである。

そこで本稿では、先ず英語教育者各氏のこの点に関する考え方を調べ、その後自分なりの考察を加え、その結果を日頃の授業にどう反映させようとするかを述べてみたい。

II 英語的発想

この言葉について学会発表を聞いたのは、1996年8月、全国英語教育学会仙台大会であった。西南女学院短大、橋本氏は、英語的思考には論理的 (logic) と修辞学的 (rhetoric) の二面性があるとす。青森県立弘前高の中野

氏は、英文のテキスト構造にありとし、これを意識した指導により、生徒は英文の論理的な文章展開を意識する様になり、これを持続すれば生徒は徐々に英語的思考を身に付けていくとする。

この様な見解は他にも見られる。池田氏は、次のように記している。Aristotleの著Rhetoricには、「弁論に熟達するためには論理学に通じなければならない」との規定があり、これが西洋古典修辞学の伝統に受け継がれている。古典修辞学は19世紀末にその効用に終止符が打たれたが、それまでの2千年以上におよんで文法と共存しながら、西洋語の表現の基準となってきた学問であった。その内容を学ぶことは英文の解釈と鑑賞に必要であることはもちろん、作文・会話で成熟した英語を使う能力を獲得するために必須であり、ひいては西洋人の思考方式を理解する手がかりとなる。更に別のところで、論理性 (Logicalness) を実現する手段として、文の等位、従位、語順に注意を払うこと、としている。

また、大津氏は、その著の末尾に述べている。われわれは情感的に言葉を選択する習慣の下で育っているから、英語的な論理的考え方、すなわち英語的な発想を学ぶよう心がけねばならぬわけである、と。

このように見て来ると、論理性と修辞学とは、英語的発想を論ずる際には抜き難いものの様である。しかし、日頃の教室においてこの二つの

ポイントを生かした授業がどれほど実行できるであろうか。中野氏は授業での検証をしているが、それを継続的に行なうとすれば、教材の内容はかなり偏ったものになりそうである。更に、私の立場で言えば、実用的な英語で、それも、「使える英語」を教えたいと志向する時、その英語は必ずしもこの二つのポイントを多く包含するとは言えない。もっと日常的に、普通の英文を用いながら、英語的発想を学ぶことが出来ないだろうか。

池田氏はまた次の様に述べている。英語にくらべて、日本語は概して女性的で細密すぎるために、自己の思想を主張する力が弱く、他人の感情を傷つけまいとする敬語や玉虫色の不明瞭な表現が異常に発達していて、多角的な表現力に乏しい。一方、英語のダイナミックな表現技術は古今の英米の文学者と思想家たちの意識的な実験と創造の成果である。更に、英語国民は簡潔な表現に快感を持つが、われわれは当たりのよい、やや曖昧な表現をよしとする、として次の例文を挙げている。It is clear that he is a genius. Clearly he is a genius.

大津氏はこう述べる。われわれ日本人は発想も自動詞的である。それにたいして英語国人は発想も表現も他動詞的ということになる。われわれは思考そのものが自動詞的であるから、英語で表現したり、日本語を英訳したりするときにはできるだけ他動詞で発想し、他動詞で表現せぬばならぬ。その例として次の文を挙げる。彼が会長に選ばれることはあるまい。I don't think they will elect him president. この地方はもうすぐ冬になるだろう。This district will have winter soon.

上記の二つの見解に触れると、英語的発想というものは英文を日・英語の違いに注意しながら、分析的に見ていくことで感じ取ることがで

きるのではないか、その英文に論理性やレトリックが含まれていなくとも英語的発想は発見できることがあるのではないか、という考えが浮かんで来る。つまりマクロな視点よりミクロの視点から英語的発想を捉えていくのである。

では次に、日本語で書かれたピーターセン氏の著書から引用する。不定冠詞の“a”は名詞につくアクセサリーではない。ネイティブスピーカーにとって、「名詞にaをつける」という表現は無意味である。英語で話すとき先行して「意味的なカテゴリー」を決めるのは名詞でなく、aの有無である。「aに名詞をつける」としかいいようがない。そして例文は、Last night, I ate a chicken in the backyard. である。著者によれば、ここでaをつけるなら(と、やはり書いてしまうが)、鶏を一羽丸ごと食べることになるというのである。日・英語間の、数に対する意識の違いがここにみられるという。

上の例は余りにミクロと言われるかも知れないので少し観点を変えてみる。工学系の学生に教えている福井工業大学の河上邦雄氏はこう発表している。英文を日本語に訳する際常に英文をsense groupの単位で切って、文頭から順次分析的に訳していく。こうすることによって英語の構造を理解し、英語を母国語とする人々の発想、思考様式と同じ流れで意味を理解していくようになる。また、坂井孝彦氏はJACET1996年大会でこう発表している。意味のかたまり(=センス・グループ)毎に斜線を入れていきながら、このかたまり毎に文頭から順送り式に意味をとらえていく。そうすれば、英文における思考の流れや発想の方法までもとらえていける。又、英文と和文の発想構造の違いを意識させて呉れる、と。

両氏の見解は正に我が意を得たりという感じ

である。何故なら、自分自身の授業を既にこの方式で行なっているから。易しい口語体のテキストを読むことをなんとかしてリスニングの訓練に繋がられないか、という模索に対する私の答えがこれであった。耳から入って来る英語は当然の事ながら、入って来る順番でどんどん理解していかなければ相手のスピードについて行けない。だから、読む時にも文頭から順に理解していく習慣をつけるべきである。例えば、関係代名詞でも先行詞までを訳してしまい、その後「それは」とか「かれらは」とかの代名詞に置き換えて後へ繋いでいく方法をとっている。

以上から、私の教室における「英語的発想」とは、英文を文頭からセンス・グループ毎に理解して行く時に発見する日・英語の「違いのすべて」ということになる。平均的の学生にあっては、案外この「違い」に気付かずに流れてしまっている様なので、それを事細かに指摘してやるのが教師の役割と思っている。例えば、I don't think…と否定の結論を早く言ってしまうとか、I'm afraid…と否定の予告をするとか、throw it onto the shelfで、先ず投げると言っておいてその後により細かい説明が続く、そして時に onto という短い前置詞が物の飛んで行く様子、着地までかなり描写的に表現するものだ、というようなこと。

ピーターセン氏はこう記している。日本にいながら英語の感覚に馴染むことは、年齢を問わずに十分にできると思う。必要なのは没頭することだけである。私の経験でいえば、本人にとって心から夢中になれる内容さえあれば、どのような英語を対象にしても構わない。とにかく本当に夢中になれば後はどれだけ時間を積み重ねるかという問題だけである。その際に、その英語を英語としてあるがままに読むことが大切

なことだろうと思う。日本語にどう訳すかという以前に、その表現の内側に入り込むことが必要だろう。それは、なぜこの表現になっているかの鍵は、その英語自身の中にあるからである、と。

Ⅲ Thinking in English

この言葉が気になるのは、私自身果たして I always think in English. と言えるかと自問してみると自信がない為であるが、多くの英語教育者がこのことについてどう考えているのか、また教室において学生にこれをモットーとして繰り返し言うとしたら、それは学生達を motivate し、encourage する事に繋がるのか、ということ考察してみたい。その為に先ず、この考え方が日本の英語教授法の中でどう位置づけられているのかを見たい。

伊藤氏によれば、日本に導入された教授法は 12 通りある。Basic English, Direct Method, Graded Direct Method (GDM 又は Harvard Method), Grammar-Translation Method, Mastery Method, Natural Method, Oral Approach, Oral Method, Phonetic Method, Practice Method, Psychological Method, Reading Method である。このうち、所謂ダイレクトメソッドに分類されるものは六つである。これは 20 世紀初頭に隆盛を極めた教授法で、教師がすべて英語で授業を行なうものである。これらの中で最も影響力を及ぼしたのはパーマーの Oral Method とフリーズの Oral Approach (いずれもダイレクト系メソッド) であったが、パーマーの教授法は後には翻訳や文法練習を加味した折衷法 (Eclectic Method) へと変わっていった、という。私はこの修正がなぜ必要であったのかに特に注目したい。パーマーは 1992 年

文部省英語顧問として来日し、英語教育研究所の初代所長となり、以後14年間オーラル・メソッドの普及に努めたが、当時の訳読法中心の日本では十分に普及させることは出来なかった、という。伊藤氏は、パーマー理論の最大の問題点を、文字言語や文字言語技能の独自の存在を認めようとしないうことで、それは母国語においてはある程度妥当であるが、外国語においては必ずしも妥当ではない、としている。

次に伊藤氏は、日本人が、日本語と異なる英語を教授する為に考案した教育法として、訳読法、英文読解法、英文解釈法、直読直解法、グループ・メソッドの五つをあげている。歴史的には中浜万次郎の「後戻り方式」の訳読法、1905年の南日恒太郎の「英文解釈法」による熟語や構文を中心とした訳読法（日本式グラマー・トランスレーション・メソッド）が出現し、小野圭次郎、山崎貞を経て昭和30年代まで訳読法の主流となった、という。その間、1919年に浦口文治が「グループ・メソッド」という一種の直読直解法を発表した。これは、従来の後戻り方式に対し、頭からセンス・グループ単位で訳していく方法であった。浦口に先立ち、1897年に外山正一が「音読棒読み」の必要性を、1915年には村田文治が「直読直解法」を主張している。また、英文解釈法はやがて「英文読解法」という用語をも併用するようになり、文法、構文、熟語、単語を手がかりとして和訳することによって英文の意味を理解する方法となった。

上記の様に日本に大きな影響を与えたパーマーやフリーズのダイレクト系メソッドは、伊藤氏によると、幼児が母国語を習得する過程をモデルとしている。そして原則として母国語を介さずに外国語を学習するので、意味は事物を通じてダイレクトに言葉に結び付けられる。そこ

では“Thinking in English”が強調され、英語は英語の範疇において学習される、という。とすると、学生に“Think in English”と言って奨励することは、即ちダイレクト・メソッドを良しとして、その方法で英語を勉強しなさいと言うのに等しいことになる。伊藤氏の記した、この手法の特徴と問題点を参考にしながら、私が担当している、英語を専攻としていない学生たちにとってこれがどのような意味を持つのかを考察してみたい。

- ①幼児が置かれている環境は、その言葉しか聞かれない場所である。更に幼児の頭脳は白紙の状態であり、何ら習得を妨げるものは無い。一般の学生は全てを日本語で処理する頭になっているし、英語漬け環境は海外留学しか手がなく、それも昨今では留学している日本人が多く必ずしも英語漬けになるとは限らない。
- ②授業は原則としてすべて英語で行なうとされているが、日本人教師の場合にどれほど完璧に近い英語で教えられるか、またその様な教師がいても能率的に学生に十分に理解させられるかが問題である。また逆にネイティブ教師は英語力の不十分な学生への対処が十分には出来ない。
- ③意味は事物等を通じてダイレクトに教えられると言うが、This is a pen.の世界は別として、少し抽象的な世界に入ると非常に非効率的になるし、なぜ簡単に日本語に置き換えてはいけぬのか、という疑問が生じる。
- ④文法は帰納的に、本文の中で非体系的に教えられる。これは文法ばかりの授業の耐え難さと、大学生になるまでに既にある程度体系的に学んで来ていることを考えれば、英語専攻外の学生にとっては適していよ

う。

⑤口頭練習が中心でリーディングやライティングの力が十分につかない。このことは、ある程度英語が出来る者であっても英語で話す時には、言いたいことを十分に表現できないもどかしさと、自分が何か幼児に戻ってしまった様な情けない思いを感じることもあるのを思い起せば納得がいく。殆どの学生にとっては日本語から発して物を考えない限り、考える内容は非常に限定された範囲の、かなり幼稚なものになってしまうのが現実であろう。

⑥母国語を利用せず、まったく外国語だけで意味を理解させることは困難であるばかりでなく、非効率的である。これも納得がいく。

以上をもって、このダイレクト系メソッドとその中心的な手法である Thinking in English に大なる疑問を抱くのであるが、この点について何人かの英語教育者の見解を紹介し、それについて私見を述べてみたい。

①書かれた文字と異なり音声はすぐ消えてしまうものであるから、認知は即時的でなければならぬし、無意識的でなければならぬ。そしてこの両方の要素の合成されたものがただちに意味として理解できなければならない。聞き取りの訓練の間に翻訳を不可とする立場はここから生まれる。母国語を介在させる習慣は常に回り道をさせることになり即時的で無意識的な理解は永久に不可能だからである。(田崎氏)

この様に出来れば素晴らしいと思う。しかし学生が「……ねばならない」と言われて奮い立つかどうか、また教師の側でも自分の頭の中で、日本語が介在していないと何人が断言できるだろうか。

②NHKラジオ英会話の聴取者がQ&Aコーナーで質問している。

先日「英語を日本語に換えてから理解する翻訳グセが頭の中についてしまい、会話力のスムーズな上達を妨げてしまいます」という広告文が目にとまりました。実は、私も頭の中で、英語を日本語に換えてから理解するというように英語を聞いていたからです。英語に堪能な人はとてつもなくすばやく訳した上で、日本語で理解しているのではないかと考え、あまり悩まないようにしていましたが、やはり不安です。松本先生の場合はどうなのでしょう。教えてください。

答えはこうである。科学的な根拠はありませんが、英語を英語のまま理解しているという感じがします。このコーナーで何回となく、英英辞典を使うことと、やさしい英文を多読することを薦めているのも、日本語に訳さず理解できるようになるためです。

この答えによって質問者は納得し、元気づけられたらどうか。回答者、神田外国語大学、松本茂氏はディベートの達人のようなので、ご自分で感ずるままに回答されているのだろうが、私の答えは多分こうなる。頭の中のプロセスを気にするのはやめましょう。あなたが英語を聞いて相手の言っていることが分かればそれでいいのです。もしあなたが未だそうならないければ、それに近づけるように頑張りましょう。私自身も自分の頭の中のことははっきりとは分かりませんが、少なくともいちいち訳をしているとは思いません。

③Cambridge International Dictionary of Englishの「手引き書」の中で、母語に依存する受動的な学習態度ではなく、……こ

れからの学習方法は日本語に依存することをできるだけ少なくし、訳読方式よりも、英語を英語で理解することを主眼とすることが望ましい。英英辞典の効用は「英語で思考し、英語で説明する表現力の豊かさを培う」ところにあります。(筑波大学、島岡 丘氏)

まず、母語に依存するのが「受動的」とされるのが分からぬし、私の場合、このCIDEの如く non-native 用につくられたものであっても、英英辞典を使うのは、英和辞典の訳語がどうにもシッカリ来ない時の調べと、英文を書く際にその語を用いることがニュアンスの点で問題がないかの確認の為である。もし英和辞典の訳語で意味がしっかりと把握できれば、学生にとっては英英辞典の説明を生半可にしか理解出来ないで終わるよりずっと良いし、能率的ではないか。

④英問英答の考え方は、最初日本語で考えてからそれを英語に直してみるというのではなく、初めから直接的に英答が出て来るようにします。対話の内容は既に分かっているのですから、英語を日本語に置き換えないうで英語のまま理解するようにします。(安藤氏)

どうにも空虚に響く。学生の立場に立ったら、どうすればその様に出来るのか、それを教えてよ、という気分になるのではないか。頭の中でどのようなプロセスを経ようと、すばやく正答が言えれば十分ではないか。

⑤日本人が英語を学習する場合、ある程度日本語訳を介在させることは避けられない。だが、このような学習方略を続けていると、「訳語が違えば意味が違い、訳語が同じなら意味は同じ」と考える言語感覚の麻痺した学習者になってしまう恐れがある。この

ような学習者が英語を教える立場になった場合、及ぼす被害は一層甚大である。(御手洗氏)

意味が違うのに訳語が同じになってしまうのは、英語の力というよりはむしろ日本語の表現力と、その英文の内容についての知識、理解力の問題ではなからうか。日本語で文学を解さぬ人に、英語の文学の理解、鑑賞を期待するのは無理であろう。

⑥英語のアスペクト(進行形・完了形)習得の難しさに拍車をかけているのが日本語に置き換えて理解しようとする学習法である。(愛知淑徳大、大学院、真杉理恵氏)

もし日本語に置き換えることが理解を難しくしていると言うのなら、その置き換え方と説明の仕方が拙劣ということであって、置き換えること、そのものが間違いとは言えないであろう。

私には、どうしても次の二氏の言葉の方が率直で受け入れ易い。

⑦四六時中日本語でものを考えている生徒に、英文を読む時だけ全部英語で考えろと言っても無理であろう。同氏は、8年後別の著書で次の様に述べている。最近の言語の発達過程の研究は、学習者は最初は第一言語を土台にして第二言語のシステムを発達させていくが、そのシステムを次第に第一言語から独立させていく、というプロセスを明らかにしている。最初のうち、生徒達は英語の音声・語彙・文法・意味を、日本語のそれに置き換えたり比べたりして理解しようとする。このことは、日本語を全く使用しない直接法による授業でも、生徒は自分勝手にやっている。初めから Thinking in English ができるわけがないからである。しかし文法・訳読法のように、

いつも英語を日本語に置き換えたり、英語を日本語と対比するというようなことをしていると、英語の言語システムはいつまでたっても日本語から独立できないであろう。(土屋氏)

- ⑧1970年までは多くの英語の先生が「英語で考える」ことが英語をマスターすることであると言っていた。しかし「英語で考える」とはどういうことかと聞かれて誰も答えられなかった。それ以後「英語で考えなさい」という先生はいなくなった。もしそれを言うならば、初心者か「英語で考える」ようになる方法を提示しなければならなかったからである、という国広正雄氏の一文を引用の後、センス・グループで訳をしながら朗読をすることが必要である。そうすれば、これが英語の語順で考える経験になり、思考訓練になる。英語の語順を習得することが、「英語で考える」ことを身につけることになる。これで初心者にも「英語で考えなさい」つまり「英語の語順で考えなさい」と言うことができる。(上野氏)

以上から、Thinking in Englishを到達すべき目標として掲げることはよしとするが、これを金科玉条のごとく学生を叱咤する為のモットーとして用いることには反対せざるを得ない。それは頭の中で起こっていることであり、I always think in English.と主張する人でも、ひょっとすると自分がそう思っているだけで、実際には日本語を介しているのかも知れないからである。どうしてもこれを唱えたい場合にはこの言葉に酔ってその気になり勉強に励みがつくような学生を選ぶべきであろう。自分の英語力に少しでも懐疑的な相手にとっては禁句と言ってもよいのではないか。

IV 授業への反映

①直読直解によって英文を理解していく。

「理解」であって「翻訳」ではない。会話においては当然のことながら耳から入って来る順に理解していかなければ話についていけない。読解においてこの訓練を重ねていくことが聞く場合にプラス効果を持つであろうことは予想できる。授業においてこれを日常やっている学生からは「通し訳」を要望される。しかし私はそれはあなたたちの日本語の力で出来るでしょうと言って応じない。文頭からセンス・グループを追って理解していくうちに英語の語順、つまり英語国民の発想の展開にも気付いていく。

土屋氏は、日本人の苦手とする関係代名詞に関して、朝日新聞外報部長白井健策氏の一文からの引用「関係代名詞の類は、あ、そうそう、と教えればよいのだ。」で、この意見は、英語の専門家からは乱暴すぎると文句が出そうな気がする。しかしそういう人たちこそ、いかに長年の訳読法に毒されているかを思い知るべきだ。関係詞節は、たとい制限節であろうと、本来は語順のまま理解すべきものである。白井氏の指摘する通り、これをひっくり返して理解している限り、決して使い物にはならないのだ、と記している。

②日・英語の対比において英文を理解していく。

これはThinking in English.とは相反する考え方である。頭の中の日本語を追い出せないなら、それとの違いを論理的に分析することを通じて、英語的発想に近づけるのではないか。前に、私の考える英語的発想とは、英文を文頭からセンス・グループ毎に理解していく時に発見する日・英語の「違いのすべて」と書いた。「違い」は色々なところに発見できる。1997年の九州

大学の入試問題に次の様な文があった。

a scientist can see the future by watching four-year-olds interact... And then science waits for them to grow up.このような主語もあるのか、という発見である。もっと日常会話的な例として、What brings you here?これも日本語にはない。

③使う為の英語を意識的に学んでいく。

本当に身に付いた英語とは何であろうか。発話に使えるようになった英語こそ身に付いたと言える英語ではなからうか。私が、英語を専門としない学生に用いているテキストは易しいので、意味がわかっただけで満足しては駄目、ここにある役に立ちそうな表現が口からスラスラと言えるまでになって欲しいと要求する。そして授業では毎回前週の復習と称して、日本語で問い掛け、それに対応する英語表現を自分のノートに書かせる。その後板書の答えと照合させる。この方法は半期に一回のアンケートにおいても大多数の学生から支持されている。

では上記の「役に立ちそうな表現」の選択基準はどのようなものか。先ず、普通の学生の日常生活の中で頻出しそうなもの、それから所謂 collocation と言われるものが主である。この collocation については、松本安弘氏が、英語をネイティブ・スピーカー並みに流暢に使いこなすためにはコロケーションに習熟することが不可欠です、と述べているし、Longman Dictionary of Contemporary English の Language Note で In order to speak natural English, you need to be familiar with collocations. とその重要性を強調し、“a heavy (not big) smoker”, “free of charge (not cost, payment, etc.)” の例を挙げている。

こうして憶えた英語表現を使って相手との communicate に成功するという体験が出来れば本当の motivation になると考える。

V おわりに

以上が主題に関する私の現時点での答えである。Thinking in English については自分の考え方がかなり明確になったと思うので、今後余り変化、修正はないと思う。ここで、もう一度大津氏の言葉を引用したい。われわれはふたつの母国語を持つことはできない。われわれの思考や感情はあるひとつの言語で営まれるのであって、ほかの言語は母国語との比較、類推によって理解され、使用されるのである。一方、「英語的発想」については、論理的、というような概括的な捉え方よりも、我々が教室で学ぶ英文の構造と表現方法のすべてから、日本語との違いを感じ取り、それを自分の頭の中で整理していくことによって、言語の学習と「英語的発想」への理解を両立させるべき、という立場である。その意味で、今後は池田氏が、言語哲学や意味論においては言うまでもなく、Aristotle 以来修辞学のうちでもっとも重要な項目であって、と述べ、Metaphors We Live By (George Lakoff & Mark Johnson, University of Chicago, 1979) というタイトルに象徴されるような、メタファを「英語的発想」のひとつの側面として意識的に指導していきたい。

いま、英語の、それも使える英語の必要性が大いに叫ばれている。使う目的によってそのレベルは様々であって良いと思う。私の担当する、英語が専門外の学生は中学校以来6年以上の学習の結果、英語について好き嫌い、出来る出来ないの結論を出してしまっている場合が少なくない。その場合に大学での英語の勉強で今まで以上に英語を嫌いになって欲しくないと思

う。その結果、読解が容易で内容が身近な日常的な教材を選ぶことになる。学生には訳が分かっただけで満足せず、使える表現をしっかりと憶えるようにと指導する。なぜか最近では暗記が罪悪視される様である。英文を読みながら、その中に出て来る英語表現を暗記することまで良くないとは言って欲しくない。英語漬けでない環境で自然に憶えることなど有り得ようか。無理にでも憶えることが必要で、そこが外国語の勉強の辛いところである。英語は No Pain No Gain. であると教師は明言すべきではないだろうか。学生がちょっと努力すれば手の届くレベルの英語を、楽しみながら、かと言って遊びにまでは流れず、共に学び、少しは今までより英語が好きになって私の教室から去っていつてくれる様に努力せねば、と思う次第である。

(参考文献)

- 池田拓朗 (1992) 「英語文体論」 研究社出版
- 大津栄一郎 (1993) 「英語の感覚」 上、下巻
岩波新書
- マーク・ピーターセン (1988) 「日本人の英語」 岩波新書
- (1990) 「続日本人の英語」 岩波新書
- 伊藤嘉一 (1984) 「英語教授法のすべて」
大修館書店
- 上野 互 (1996) 「同時通訳方式の速読法とリスニングの整合性について」 九州英語教育学会
紀要第24号
- 御手洗靖 (1996) 「日本人英語学習者の語感を養成するための用例(2)」
同上
- 田崎清忠 (1969) 「英語教育技術 (理論と実践)」 大修館書店
- 安藤賢一 (1996) 「Witty Tales」 序文 成美堂
- 土屋澄男 (1983) 「英語指導の基礎技術」
大修館書店
- 土屋澄男 (1990) 「英語科教育法入門」 研究社出版